

はじめに

金沢大学では、2010年4月25日（日）に「新しい民俗芸能の創出の道」と題したシンポジウムを行い、民俗芸能や伝統芸能の研究者や実践者による研究会を開催した。本報告書はそこでの発表を下敷きにしてまとめたものである。シンポジウムの開催趣旨および発表題目は次の通りである。

開催趣旨

グローバル化する経済にともない、国境を越えた人の流れも活発化している。日中無形文化遺産プロジェクトでは、無形文化遺産を次世代に伝承していくための調査研究活動を行ってきた。今回のシンポジウムでは、伝統芸能が次世代に引き継がれていく形態や様式、その担い手像について議論を深めることによって、民俗芸能を将来にわたって発展させていくための道筋について検討を加える。午前の部では、民俗芸能が継承され発展していく道筋について、フィールドワークに基づく研究事例からこの問題について考えてきた研究者による発表、およびそれを踏まえたディスカッションを行う。午後の部では、午前の部での議論を受け、新しい民俗芸能の演奏活動をしているグループによる生演奏を堪能しながら、参加者とともに実際に新しい伝統芸能を楽しむ。

研究会

ジョン・アートル（金沢大学）開会挨拶・趣旨説明

神谷浩夫（金沢大学）「日系アメリカ人を媒介とした和太鼓の伝播と変容」

野澤豊一（金沢大学）「上海の太鼓文化」

ウェスリー・ウエウンテン（サンフランシスコ州立大学）「島んちゅブルース：時間と空間、サウンドの屈曲」

内田忠賢（奈良女子大学）「よさこい・YOSAKOI系祝祭の普及と増殖」

河原清（金沢市）「金沢市における能楽と町づくり」

身体表現や音楽などを多用する芸能は、無形文化のなかでもとりわけ記録や研究が困難な分野である。そのなかで本報告書では、従来の民俗芸能研究の型にとらわれない方法論と取り組みとを試みた。シンポジウムでは研究会以外にも、日米で活躍する和太鼓奏者の田中誠一氏と望月左武郎氏による太鼓のワークショップと、和太鼓や能の伴奏音楽、沖縄音楽やジャズの演奏会も行った。いずれも民俗芸能研究への新たなアプローチの一環として位置づけられたものである。まだ端緒についたばかりではあるが、これらの試みにより、今後の民俗芸能研究への貢献につながればと思う。

（野澤豊一）